

第二章 薔薇の毒、回復実験

マリナ 「もう終わりでいいのよね……」

ナース 「私の実験は終わりですが……あ、先生」

女医 「お疲れ様」

マリナ 「あ、あなたが、ここ……」

女医 「院長よ。そして、この子にあなたを使った実験を指示した人間でもあるわ」

マリナ 「この女が元凶……この女がいなければ、妹が捕えられることもなかった……」

マリナ 「早く妹を解放して！ もう実験には付き合ったのよ！」

女医 「そうしたいのは山々だけど、わたしがまだ実験していないのよね」

マリナ 「……ど、どういう意味？」

女医 「わからないの？ 案外、鈍感なのね」

マリナ 「ど、鈍感って……まさか、また実験をする気なの？」

女医 「そのままさかよ。ほら、毒液を注入してあげて」

ナース 「かしこまりました、先生」

マリナ 「待ちなさいよ……もう終わったでしょ！」

女医 「この子による実験はね。それに、一回で終わりとは言っていないわ」

マリナ 「なっ……！ だいたい、いま以上になにを試すって言うのよ！」

女医 「いまの実験でも毒液を注入されたでしょう？ カルテにもそう書いてあるし。実
はあの毒液。気持ちよくなれるだけじゃなくて、精力を高める効果もあるの。だからこそ、
あなたはいっっぱい射精できたの。で、いまから行うのは、精力を高める効果を応用した
精力回復実験。たっぷりじっくり付き合ってもらおうわ」

マリナ 「くっ……！！ こんなのなしよ！ 聞いてないわ！」

女医 「じゃあ、妹さんは解放しなくていいのね？」

マリナ 「それは……」

女医 「人質がいるってことを、くれぐれも忘れないように。主導権を握ってるのは、わ

マリナ「ふう、ふう……人をモノみたいに言って……んあつ！」

女医 「モノだとは思っていないわよ？ さっきも言った通り、わたしは医者だもの。人命は大切に扱うわ」

ナース「先生。薔薇の毒の注入が終わりました」

女医 「ご苦勞様。あとはサポートをお願いね。実験は、すべてわたしがやるから。さあ、お嬢さん。脚を開きなさい。わたしが入れるくらいにね」

マリナ「くっ……」

【女医、マリナの股間へ移動】

女医 「ふふふっ♪ いやらしいおちんぼね。血管が浮き出て、反りもよくて……あと、このにおい♪ 精液と毒液のにおいだけじゃないわ。鼻をつくような淫臭が、むわあつて広がってる♪」

マリナ「や、やるなら早くして……早く終わりたいの」

女医 「あら、さっさと責めてっておねだりしてるの？」

マリナ「いまのどこがおねだりなのよ！」

ナース「マリナ様は、先ほどの実験の際にも早く射精をさせてほしいとねだってきました」

女医「おねだり上手のマズさんなのかしら？」

マリナ「違うっ……」

女医「それ、おちんぼツンツン♪」

マリナ「あっ、んっ……！」

女医「感度良好♪ 指でちよっと触っただけでこんなにビクビクしちゃって。お口で啞えたらどうなっちゃうのかしらねえ♪」

マリナ（フェラする気なの？ 手だけでも、あんなに感じたのに……）

女医「怯えてる♪ 自分がどうなっちゃうのか予想したのね……いえ、おちんぼには手コキだけって伝えておいたから……口で啞えられたら、気持ちよすぎてどうなるのか予想もできないって感じかしら♪」

マリナ「だ、だったらならによ……」

女医 「やり甲斐があるわ♪ わたしはねえ、平然としてる子を随とすよりも、そうやって怯える子をかawaiiがるほうが好きなの♪ というわけだから、わたしも勃起しちゃうくらい、かわいいところを見せてね……お嬢さん♪ あああむっ」

マリナ 「うくっ……!!」

女医 「はむっ、んじゆるっ、れるじゅう、じゅぷぷっ……んふふっ、お口の中で暴れる……♪ んじゅっ、じゆるるっ、れるっ、じゅぷじゅぷっ……じゅぷっ」

マリナ 「くっ……はああう……舌が這い回って……!!」

女医 「じゅぼぼっ、ぢゅりゅぢゅりゅっ……確か、カリが好きなのよね……このくびれのところも、舌を入れて……」

マリナ 「あぐっ……!! あっ、あ、ああっ! んんんっ!」

女医 「こら、暴れないの……じゆるっ、むじゅりゅっ、びじゅぐっ……暴れるのは、おちんぼだけにしなさい……んれるっ、じゅっ……はむっ、はぷっ……んじゆるっ……じゃないと、しゃぶってあげられないでしょお……れるっ、んじゅっ、じゆるるるっ」

マリナ 「はあ、くろう……」

女医 「えっちなおつゆが出てきたわね……お口の中がしょっぱいわあ……じゅるっ、れるっ、んじゅるっ……おちんぽもビクビクしっぱなしで、お口に対する感度も良好……れるう、むぢゅりゅっ、ぴじゅぐりゅっ……」

ナース 「先生、硬さはどうでしょうか。記録しますので」

女医 「ガチガチのギンギンよ……奥まで啜えると、喉奥が圧迫されるぐらい……んじゅう、じゅるるるう……はああむっ……んっ、んっ、んんっ……!!」

マリナ 「んはっ……奥で、先っぽが締められて……っ！ あ、あ、あっ、あっっ！」

マリナ (ナースといい医者といい、どうしてこんなにテクニシャンなの……)

女医 「じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶっ……!!」

マリナ 「急にっ……激しく……っ！」

マリナ (このままされたら、確実に意識が飛んじゃう……だけど、薬に関しては少し我慢できるようになったかも……)

女医 「ぴじゅぐっ、んじゅるっ、じゅるじゅるっ、れるっ、れえるっ……ほんと、しゃぶり甲斐のあるおちんぽだわ……実験抜きに、フェラしたいぐらい……んじゅっ、じゅるるっ、れるじゅぶう」

マリナ 「はあ、んんう……あつ、んんんっ……!!」

ナース 「先生。そろそろ薔薇の毒を追加しましょうか」

女医 「ふああっ……そうね。我慢しちゃってるし、毒液を注入して、たっぷりよがれるようにしてあげましょう」

マリナ 「なっ……い、いま入れてるので十分でしょ」

ナース 「と言ってますが、どぶどぶ注いでいいんですか？」

女医 「そこは適量で。記録を取らないといけないから」

マリナ 「承知しました。では、先ほどの1.5倍の量を尿道口から注入します」

マリナ 「待っ……んぐつつっ……!!」

女医 「また、おちんぼが暴れてるわ」

ナース 「五十%注入完了。残り五十%です」

マリナ 「ああああああっ……!! んぐうつつっ……!!」

マリナ（この診療所、思ってたよりもずっとヤバいわ……こんなわけのわからない薬を、堂々とおちんちんに入れてくるんだもの……）

ナース「注入完了。外します」

女医 「んふふっ♪ 毒液が垂れていやらしい♪ じゃ、早速……」

マリナ「待って……ひとつ聞かせて」

女医 「なにかしら？」

マリナ「い、妹にも、同じことを、したの……？」

女医 「まだ、していないわ。しちゃってもよかったんだけど、そこにあなたが来たから。ただ、あなたが拒否すれば妹ちゃんを被検体にするわ」

マリナ「妹には手を出させないわよ……」

女医 「そのほうが、わたしも都合がいいわ。あなたのほうが被検体に適してるの……ああむっ……んじゅるっ、れるっ、じゅぷぷっ、じゅぷっ、れるえうっ……!!」

マリナ「あぐっ！ あっ！ んあっ！ んはっ！ ま、まだ、話が……んぐっっ！ 途中、

なのに……はあ、んんっ、あっ、んんう……!!」

女医 「話くらい……んじゆるっ、ちゅっ、ちゅりゅりゅりゅっ……フェラしながらでも、ちゆるるっ、んじゅっ……できるでしょ……」

マリナ 「くっ、あっ、んふうっ、ひあっ……!! この状況で、話なんて……っ!!」

女医 「それだけ喋れるなら……れるちゅっ、ちゅじゅっ、ずじゅずじゅっ、可能でしょ……あむっ、はぶっ、んじゅっ、れるるっ、んじゆるっ、れえるっ……」

マリナ 「うくっ……! 責めてるほうにはわからないわよ……あっ、んあうっ!!」

マリナ (でも、聞かないといけない……っ!)

マリナ 「ふうふうふう……私のほうが、被検体に適してるとどういふことよ……」

女医 「そこね……はむっ、んじゅううっ……あなたたち姉妹は……れえろっ……エルフの血が混ざっているから……はむっ、んじゅっ……その血が……あむあむっ……れるっ、あなたのほうが濃く出てるのよ……れるっ、んじゆるっ……」

マリナ 「だ、誰がそんなことを知って……あああっ!!」

女医 「妹ちゃんを、ここに連れてきた人ね……れるむじゅっ、じゅぶじゅぶじゅぶっ……」

…ちなみに、この実験は……んじゅるっ、れるっ……エルフの血を継いでるあなたたち
じゃないといけないの……むじゅ、ちゅるるっ……そういう実験だから……♪」

マリナ「ああっ、あくっ、ふあああっ！ だから、妹のことも捕えたのね……」

女医 「んちゅっ、れるっ……そうね……はむっ、んじゅるっ……ただ、そんなことより、
おちんぼを気にしたほうがいいんじゃないかしら……れるっ、んちゅううっ……ヌメヌメ
の我慢汁が止まらなくなって、いまにも射精しちやいそうなくらい、パンパンに膨らんで
るわよ？」

マリナ「言われ、なくても……あひっ、はう、んはっ、はああんっ……！ わかって……
るっ……んんっ、あっ、あんっ、あっ、ああっ、んああっ！」

マリナ（身体が熱い……頭が、ぼうっとしてきてる……）

女医 「本当は……れるじゅぷっ、じゅぼじゅぼじゅぼ……！ すぐにでも、イキたい
んでしょお……はぷっ、んちゅっ……わたしはねえ、素直な子ならそんなに責めたりしな
いのよ……？ じゅっ、ずじゅずじゅっ、ぴちやぴちや……じゅるるるっ！」

マリナ「嘘、でしょ……ああっ、んああっ！ そんな言葉、に……はふああっ……引つか
かったり、しな、い……んあっ、んんっ、あっ、ひうっ！」

女医 「そう、我慢するのね……んぷあう……じゃあ、ここからはおっぱいで愛撫も追

加しましょうか……わたしのパイズリ、おまんこよりも気持ちいいって評判なのよ？」

マリナ「はあ、はあ……好きに、すればいいわ……これで、妹を護れるなら……っ」

女医 「じゃあ、お言葉に甘えてえ……あ、挿入の感触も味わわせてあげるわね。しっかしとお、おっぱいを寄せてえ、お肉を密着させてえ……ほら、行くわよ。わたしの唾液とあなたの我慢汁でヌルヌルのドロドロになつてるおちんぼ、おっぱいまんこで啜えちゃうから……♪」

マリナ「んふぁっ……!!」

女医 「亀頭が半分入っただけでこの反応……♪ まずは、亀頭だけこすってあげるわ。フェラは、そのあとまで我慢なさい。ほら、おっぱいのお肉で、亀頭だけを、ぬちゅぬちゅぬちゅっ……♪」

マリナ「んおっ、おおおっ、ほおおっ……!!」

女医 「あーら、顎が反っちゃった♪ ちよつと大変だけど、まだ続けてあげるわ♪ ほおら、ぬちゅぬちゅ、ぬちゅぬちゅ……おっぱいまんこの入り口で、亀頭をぬちゅぬちゅっ♪」

マリナ「あっ、んっ、あ、あぁっ、ん、ひっ、はっ、ふっ……!!」

女医 「細かくおっぱいを上下に動かして……ぬちゅぬちゅ……ちゃんと亀頭だけを締め付けて……ぬちゅぬちゅ……敏感な亀さんを……ぬちゅぬちゅ、ぬちゅぬちゅ」

マリナ 「あっ、んぐっ！ ひあっ！ ひっ！ んいっ！ いうっ！ ふああっ！」

ナース 「実験開始から、もっとも感じていると思われます」

女医 「ふうん……これが好きだったのねえ。もっと早くやってあげればよかったわ♪」

マリナ (ああ……気持ちいい……本当に、おまんこよりいいかも……)

女医 「気持ちよかったら、我慢しないで教えなさいね。やる気が違ってくるから♪」

マリナ 「ふうっ、はあっ、んっ！ あっ！ んいっ……ひっ、はっ、はっふ……！ わたしは、妹のために……あっ、んっっ、はっっ、んっくう……実験台になってる、だけ……あなたのやる気なんて、知らない……っ！」

女医 「そんなこと言われると、いじめたくなるわね……一気におっぱいの中に挿入させちゃうわ……それっ♪」

マリナ 「んあああああっ……！！」

女医 「んっっ……♪ くら、ビクビク暴れないの……♪」

マリナ 「だ、だって……っ！」

ナース 「絶頂時と似た痙攣です。射精していませんでしょうか」

女医 「おっぱいの中でビクビクしてるけど、射精はしてないわ。よく耐えてる♪」

マリナ （イキそうだった……いまの、もう一回やられたら……）

女医 「だけど、二回目は耐えられるかしらね……♪」

マリナ 「なっ……っ！」

マリナ （私の心が読めるっていうの……？）

女医 「うふふっ、怯えてる♪ その顔、好きよ♪ だから、もう一回……おっぱいを上げて、一気に……じゅぷんっ♪」

マリナ 「ああああああっ……っ！！ あっ、んおっ、おおっ、んおおっ……っ！！」

女医 「ビクビク暴れてかわいいわ♪ もう一回やってあげたいけどお……」

マリナ 「も、もう、同じことはいいでしょ……っ！」

女医 「じゃあ、もう一回決定ね。またおっぱいを上げて……じゅぷんっ♪」

マリナ 「あぐううつつっ！」

女医 「うふふっ♪ 何回やっても、いつちやったときみたいに跳ねてくれるのねえ」

ナース 「先生、遊んでいないで実験を」

女医 「わかってるわよ。でも、これだって立派な記録になるわ……あむっ、んちゅちゅっ、ぐぼぐぼっ……んぼっ、んじゅるっ、じゅるるっ、じゅるっ、れるっ」

マリナ 「はあ、んんっ、ああっ、んんっ……！ おっぱいとお口、どっちかに……」

女医 「するわけ……んぼぼっ、ぐぼっ……ないでしょ……こんなに感じてるんだから、どっちもやるに決まってるわ……はぶっっ、んぼっ、じゅるうっ、じゅぼじゅぼっ」

マリナ （少しでも気を抜いたらイっちゃう……なんとか、正気を保たないと……）

マリナ 「んんう……ふう、ふう……んっ、んんっ……！」

ナース 「下唇を噛んでいますね」

女医 「あら、そんなに我慢しなくていいのに……ぐふぐふう、ぐぼぐぼつ、ぢゆるっ……
びゆるるって、しちゃえばいいのよ……れるっ、んじゆるるるっ……もう、耐えてると
ころは十分に見せてもらったし……れるじゅっ、じゆるっ……！」

マリナ 「だからって、本当に出したら追撃する気なんでしょ……！」

女医 「それは……じゆる、れるじゅっ、ぐふふう……時と場合に因るわね……んじゆるっ、
れるっ、ぢゆるるるっ……！」

マリナ 「ほら見なさい……確約なんてないんですよ……あっ、んんっ！」

女医 「少しは、わたしのことがわかってきたのね……んじゆるっ、れるっ、じゅふう
ふっ……フェラとパイズリだけの関係で、ここまでわかってくれるだなんて……嬉しくて、
フェラが激しくなっちゃうわ♪ じゅふうじゅふうじゅふうじゅふうじゅふうっ！」

マリナ 「あ、あっ！ んんっ！ んおっ！ おおっ！」

女医 「じゅふうじゅふうじゅふうじゅふうっ！」

マリナ 「はふっ、あっ、はふ、はふ、はふっ……んんんっ！」

女医 「んふうっ、かあいい……じゅふうじゅふうじゅふうじゅふうっ！」

マリナ「ひぐっ、はぐっ、んぐっ、ふんぐっ……！」

マリナ（ダメ、出る……っ！ だけど……まだちよっただけ……！）

女医 「はぷっ、んぷっ、んぷっ、んぼぼっ、れるっ、んじゆるっ！」

マリナ「はあはあはあはあはあはあ……！」

女医 「息が荒いわよ……じゆるぷっ！ びじゅぐっ！ ぢるるるっ！」

マリナ「はあ、はあ、はあ……んんんんっ！ まだ……まだ耐えないと……っ！」

女医 「てっきり出ちやうって言いだすと思ったのに、まだ耐えるのね♪ 気に入ったわ♪ あなた、血筋以上に被検体向きの性格だわ♪ だ・か・ら……オマケに、もう一回毒液を注入してあげる……♪」

マリナ「そんなっ……！」

ナース「いつでも行けるように準備はできています。尿道口に差し込みます」

マリナ「あああっ！ ダメっ！ いまは……！」

ナース「注入開始」

マリナ「ああああああつ！ おちんちん、おちんちん……あああああつ！ おちんちんのなかあ……いっぱい流れ込んでくりゆうう……！」

女医 「これ以上は耐えられそうにないから、たっぷり入れちゃって」

ナース「かしこまりました。では、3倍注入します」

マリナ「そんなに……ああああああつ！」

女医 「おちんぼ、熱くてビクビク♪ わたしのおっぱい、火傷しちゃいそうよ」

マリナ「こっちは、そんな程度じゃ……済ま、にやいい……っ！」

ナース「注入完了。先生、どうぞ」

女医 「ありがとう……じゃあ、最後の刺激、楽しんでね♪ あああむっ！ じゅぼじゅぼじゅぼっ！ じゅぼぼうっ！ んじゅるっ！ はぶっ、んぶっ、んじゅんじゅっ！」

マリナ「あぐう！ ああう！ 出りゅっ……！ それ、出ちゃう……っ！」

女医 「らひていいのよお……じゅるるっ！ じゅぶっ！ ぢゅばぢゅばっ！ れるじゅっ！ れるれるるっ！ わたしのお口に、たっぷり過ぎなさい……んぶんぶんぶん

ぶっ！ ぐぼぐぼっ！ じゅるるるるっ！

マリナ 「あっ！ あっ！ ひあっ！ ひぐつつっ！ らめえ……おちんちんイクっ、もうっ、おちんちんの中も、亀頭も、熱くてえ……耐えられにやい……っ！」

女医 「イキなひやい……れるじゅぶっ！ じゅぶじゅぶじゅぶっ！」

マリナ 「はあはあはあっ！ できゅ、できゅうう……おちんちん、射精しちゃう……イクううううううううううっ！」

女医 「んっ……！？ んぶっ！ んぶぶぶぶぶっ！」

ナース 「口内での射精を確認」

マリナ 「あああっ！ んんっ！ んんんっ！」

女医 「んぶっ……んくっ、じゅるるるっ……量が多いわ……んくんく……じゅるるるっ、じゅるっ、ちゅるるるっ！」

マリナ 「す、吸わないでえ……射精してりゆんだからあ……っ！」

女医 「んくっ、んくっ……吸わないと、全部搾れないでしょお……んじゅるるるっ、じゅるっ、んくんくっ……じゅるるるるっ！」

マリナ「あああああああっ!!」

女医 「じゅるるるるるるるう!!」

ナース「先生、とてもエッチです。これも記録しておきますね」

女医 「じゅるるるるっ……当然よ……はむはむっ、じゅるるるっ!! んく、んく、んく、んく……」

マリナ「ああ、はああ、ああああ、んあああっ……!!」

女医 「ふあああっ……はあ、はあ、はあ……うふふっ、どっぷり出たわね♪ あまりに多くって、飲みきれないかと思ったわ」

マリナ「こっちだって、こんなに出す気はなかったわよ……」

マリナ（気持ちよかった……さっきと同じ……すごい、快感が……）

女医 「あ、まだ残ってる……あむっ、じゅるるるるっ!!」

マリナ「うくっ……!! あなた、たち……んっ! ふたりして、そこまで搾らないと気が済まない……んはっ! の……んんっ!!」

女医 「じゅるるるっ……んく、んく……んぷああっ……あら、この子も終わったあとに
搾ったのね」

ナース 「そのように教えられていますから」

女医 「教えた通りにやってくれて、助かるわ」

マリナ 「協力者への優しさはないのね……ふう、ふう……」

女医 「これでも、十分優しいほうよ？ この子ほうが加減を知らなくて危険だし、わたしは一応、様子を見ながらやるようにしてるし」

マリナ 「そもそも、捕えて実験してる時点で優しくないのよ……」

女医 「そうね、確かに」

【女医、乳房をペニスから離す】

女医 「うわっ……谷間もドロドロ……見て、すごいエッチじゃない？」

マリナ 「見せられてどうしろって言うのよ……」

女医 「おちんぼが反応するかどうかを見るつもりだったんだけど……人によっては、これでピクってして、実験続行になるし。でも、あなたはいま反応しなかった。射精で、文字通り精根尽き果てたのね」

マリナ 「これだけ出せば、そうなるでしょ……」

女医 「確かに。で、カルテは？ ちゃんとかけてる？」

ナース 「はい、こちらに」

女医 「どれ……ふむふむ、確かにちゃんと書けてるわね。ただ……万年筆取って。ここに、一文追加……精液は、ドロっとしててちよつと苦い。食生活に偏りがある可能性が大」

マリナ 「そんなことまで……」

女医 「だって、重要なもの」

マリナ 「そう……まあいいわ、これで終わりでしょうし。早く妹を解放して」

ナース 「その前に、マリナ様の身体と衣服をキレイにしましょう」

女医 「その必要はないかもしれないわ」

ナース「ん？ まさか……」

女医 「そのまさかね。玄関のドアが開く音がしたわ。色々聞かれると面倒だし、カルテをもう少し詳細にしておかないと」

マリナ「だ、誰か来たっていうの？」

女医 「そう言ってるわ。ある意味、わたしよりも偉い人よ。あなたからすると、わたしがまだ優しいほうだったって理解することになるでしょうね」

マリナ「また実験……こんなに射精させられて、まだ続くなんて……」

女医 「覚悟する時間ぐらいは稼いであげるわ。実験自体は、わたしにも止められないけど」